

npo S-AIR

レジデンスをはじめよう!

**ΔAIR** エア  
キャンプ  
2015  
**CAMP**  
**2015**

アーティスト・イン・レジデンス事業人材育成研修

2015 December 11 - 13

レジデンスをはじめよう!

エア  
キャンプ  
2015

# AIR CAMP 2015

アーティスト・イン・レジデンス事業人材育成研修

2015 December 11 - 13

2015年12月11日~13日、札幌の特定非営利活動法人S-AIRとさっぽろ天神山アートスタジオによって企画された合宿型のアーティスト・イン・レジデンス(AIR)事業人材育成研修。日本全国から、すでにAIRを運営している人、これから始めようとしている人、個人、団体、自治体を問わず幅広い人たちが参加した。参加者は実際に札幌市内のレジデンス施設である、さっぽろ天神山アートスタジオに三日間滞在し、レクチャーを受けたり、講師や参加者同士でディスカッションをしたり、実際のAIR業務を視察するなどの研修を行った。

## CONTENTS

AIR CAMP 2015の今日的な意義ー共有とその先 東方 悠平 ..... p.2

16年間にわたるS-AIRの活動とその背景 柴田 尚 ..... p.4  
*16 Years of S-AIR and Its Background - Hisashi Shibata*

AIR CAMP 2015 講師プロフィール ..... p.8

AIR CAMP 2015 スケジュール ..... p.9

「小さな世界都市」へ 豊岡の挑戦 田口 幹也 ..... p.10  
*The Challenge of Toyooka: To Be the Local and Global City - Mikiyo Taguchi*

記憶の風景、なつかしい未来へ 日沼 禎子 ..... p.12  
*Landscape of Memories and Reminiscent Future - Teiko Hinuma*

[REPORT] 市内見学ツアー & レクチャー ..... p.14

Sa Sa Art Projects (カンボジア) のピサオット・プログラムについて ..... p.16  
*Pisaot Programme by Sa Sa Art Projects*

[REPORT] AIR CAMP 2015 に参加して リノ・ヴース ..... p.17  
*Reflection on AIR CAMP 2015 - Lyno Vuth*

San Art (ベトナム) のサン・アート・ラボラトリーについて ..... p.18  
*San Art Laboratory by San Art*

アーティスト・イン・レジデンス への期待 林 曉甫 ..... p.20  
*Expectation of Artist-in-Residence - Akio Hayashi*

[REPORT] グループ・ディスカッション ..... p.22

AIRの未来 小田井真美 ..... p.24  
*Future of Artist-in-Residence - Mami Odai*

[VOICES] 参加者より ..... p.28

## AIR CAMP 2015の今日的な意義 — 共有とその先

東方悠平 (NPO法人S-AIR)

アーティスト・イン・レジデンス (AIR) は、もともとヨーロッパで誕生し、90年代に日本に普及し始めた制度である。近年は、各地でこれまでに例をみないほど多くのAIRの実践を見ることができる。この活気づいた状況には、AIRという存在への理解が広がって共有されるようになったこと、ハードからソフトへと移行してきた文化助成の方法、町おこしの結びつきなど、複数の要因があげられる。

関係者が増え、シーンが盛り上がることは望ましいことではあるが、一方で、そもそもAIRとはどうあるべきなのか、何を目的とすべきなのかという本質的な議論がなかなかされない現状もある。AIRのもたらす機能や効果についてはすでに多くの事例もあり、観光や教育などと連携した魅力的な活動もたくさん見られる。ただしそういった実利的なメリットでのみ語られる場合、抜け落ちてしまう曖昧なものがたくさんある。ここでいまいちどAIRの原点に立ち返り、アーティストが特定の地域に一定期間滞在することのもたらす豊かな可能性について、AIRに関わる人たちが共有したり確認したりすることが重要なのではないだろうか。そうして初めて、AIRという文化が一過性のものではなく、アートにとっても社会にとっても意義のあるものとして、日本に定着すると言える。

日本で初めての合宿型AIR研修「AIR CAMP 2015」では、上記のような目的から 1.理念や目的の確認、2.ネットワークの構築、3.運営ノウハウの共有などが図られた。もちろんAIRのあり方は多様であり、それぞれが自身の置かれた状況下でのミッションを追求していくべきである。ただ、AIR CAMPを通して企画者、講師、参加者が能動的に関わり合い、学び、考えるなかで、次代にあるべきAIRの姿がそれぞれの中にぼんやりと見えてきたのではないだろうか。

## AIR CAMP 2015スケジュール



12.11 fri

### アーティスト・イン・ レジデンスとは？

13:00→

参加者が全員さっぽろ天神山アートスタジオに集まり、合宿スタート。

- オリエンテーション  
講師 & 参加者の自己紹介 / 研修の目的について / さっぽろ天神山アートスタジオの紹介
- レジデンスの歴史について

● レジデンスの今 / 事例紹介

NPO法人S-AIR (札幌市)、さっぽろ天神山アートスタジオ (札幌市)、城崎国際アートセンター (兵庫県)、鳥取藝住祭 (鳥取県)、陸前高田アーティスト・イン・レジデンス (岩手県)

18:00→

終了後、市内で温泉 & 夕食へ



12.12 sat

### 地域案内ツアー & レクチャー

9:30→

- 市内案内ツアー
- S-AIR作家展覧会場でギャラリーツアー @HUG

13:00→

- フォーラム & レクチャー

「AIRキャンプ2015 アジアフォーラム」@HUG

「アフター AIR モニカ・ソスノフスカによるレクチャー」@HUG

18:00→

懇親会



12.13 sun

### レジデンスの運営方法とは？ & レジデンスのこれから

9:30→

- 参加者フィードバック / それぞれの問題点や課題点を挙げる

13:00→

- AIRの目的とその評価 / 講師 & 参加者全員でディスカッション

15:00→

終了 & 解散

## 16年間にわたるS-AIRの活動とその背景

柴田 尚（NPO法人S-AIR 代表）

### 日本におけるAIRの胎動

日本におけるAIRの本格的なスタートとしては、一般には1990年代といわれているようだ。<sup>※1</sup>特に日本国内でAIRが広く普及しはじめたのは、文化庁が1997年（平成9年5月に公布、同年7月から施行）から始めた「アーティスト・イン・レジデンス事業」がきっかけだと思われる。筆者が運営するS-AIRはこの事業の3年目、1999年から札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会として受託している。2年目の1998年には、全国で12、1999年には15の事業採択があったという記述が筆者自身の当時の記録に残っている。現在（2015年12月12日現在）AIR\_j<sup>※2</sup>の登録数が59ということなので、プライベートなAIRの数はわかっていないものの、少なくとも16年間で5～6倍にその数が増えており、この制度が順調に普及しはじめていることがうかがえる。

### S-AIR誕生と北海道のAIR史

NPO法人S-AIR（エスエア）の前身、札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会は、前述の「アーティスト・イン・レジデンス事業」への申請を機に、1999年、札幌にあった私設アトスペースを舞台に、札幌市内のアーティスト、大学、美術館などの芸術関係者やまちづくり関係者等約20名程度の有志によって立ち上げられた民間団体である。2005年7月にNPO法人化し、2015年現在までの16年間に34カ国84名のアーティスト等を招へいし、札幌を中心に滞在製作をサポートしてきた。

国内でも古株になってきており、特に完全な民間団体としてフルサポート型で続けてきているAIR団体としては希有な存在となっている。ジャ

ンル的には、もともと美術がベースではあるが、映画監督やウェブデザイナーなどのクリエイターや、キュレーターの招へいなども幅広く行ってきた。筆者は立ち上げ当初の事務局長から現在の代表まで、常に現場に関わりながら継続してきた。S-AIRは道内のアーティスト・イン・レジデンスの継続的な組織としては、パイオニア的存在であり、しばらくの間、道内では唯一のアーティスト・イン・レジデンス団体であったが、札幌国際芸術祭が始まった2014年には、とちかアーティスト・イン・レジデンス（T-AIR）<sup>※3</sup> 登別アーティスト・イン・レジデンス<sup>※4</sup>、さっぽろ天神山アートスタジオが相継いでスタートした。S-AIRのスタートから17年目を迎える現在、道内のAIR環境はようやくそのバリエーションを広げつつある。

実はS-AIR誕生以前にも、道内における個人的なAIRとの出会いはいくつかあった。筆者は1980年代後半からS-AIRスタートの99年まで、いくつかのオルタナティブスペースを友人達と札幌で運営していたが、その中で、ヴィア九条山に滞在中の作家の展覧会やトークを何度か札幌で受け入れていた。その流れもあり、札幌アーティスト・イン・レジデンスが始まった1999年には、交流のあった札幌アリアンスフランセーズが、独自にヴィア九条山館長等のAIR関係者を招へいしてくれた。その際に同行してくれた在日フランス大使館・文化担当館のエマニュエル・ドゥ・モンガゾン女史による自国フランスとAIRの歴史に関する熱いレクチャーを今も鮮明に覚えている。

また、あまりAIRとの関連で語られることがないが、1995年には、東京のワタリウム美術館が中心となって、東京青山周辺で企画されたアートプロジェクト「水の波紋」は、筆者にとっての初

めてのAIRサポート体験と言ってよいだろう。当時、もっとも注目を集めていた美術関係者であるドクメンタ9のチーフ・キュレーター、ヤン・フォートが作家を選び、全国各地で滞在製作をさせていた。アーティスト・イン・レジデンスということばは使っていたなかったものの、数十人の国内外の作家が全国各地の素材で制作をしており、このプロジェクトは今国内で増えている地方のまちづくり系のアーティスト・イン・レジデンスのムーブメントのルーツのひとつではないかと思っている。筆者も札幌でルクセンブルグ、オランダ、アメリカ三か国の作家の滞在製作を二週間程度サポートした。

### S-AIRの活動スタイル

S-AIRは、スタート時にもともと欧米型企画ギャラリーでスタートしたことや、当時のディレクターがアメリカ人であったこと、そして、独自に欧米のAIRと関わりがあり、また、もともと自治体のサポートもあり受けられなかったことから、欧米型の作家育成型を目指してはじまっている。しかし、施設面で不足があったこともあり、2001年から札幌市の産業振興財団が運営するクリエイティブビジネスのインキュベーションセンター、インタークロス・クリエイティブ・センターの立ち上げに参加、2012年のビルの解体まで約10年事務所や空き部屋をスタジオとして無償提供や資金的補助も受けるなど、行政とも連動してきた。ビル解体以降は場所を移転し、再び完全な民間独立型で運営している。その時々で民間や行政や企業助成などの資金を組み合わせながら、常にインディペンデントな立場で運営を行ってきた民間のAIRは、国内では珍しい。このインディペンデントということがS-AIRにはとても重要な要素であった。日本で主流の地域振興型AIRにも強制的には巻き込まれず、あまり行政からの付加を感じずに作家選考をしてきたように思う。アートのサポートやマーケットが弱い

日本で、インディペンデントなAIR組織で、旅費から滞在費、展覧会費用までのフルサポートを長期間行ってきた団体は国内では極めて珍しい。

### おわりに

2015年12月現在、日本のAIRはAIR\_Jによると59施設にまで増えているというが、数が増えるということは、よいことばかりではない。それに合わせて、助成や補助、協賛などの予算が上がっているわけではなく、よい作家を確保するのに競争が激しくなっているのが実情である。S-AIRの場合もスタート時と同じような選考環境にはなく、今までと同じ公募などでは、年々レベルが落ちて来ていた。現在、S-AIRは、まだ日本ではよく知られていない有能な海外の団体、例えばイギリスのThe Arts Catalystや、ヨーロッパの若手キュレーターネットワークなどとジョイントするような新しい手法を取り入れている。また、2015年11月、複数の日本のAIRが交流する組織、「AIRネットワークジャパン」（実行委員会）が埼玉で設立され、そういった国内のネットワークにも積極的に参加を試みている。まだ歴史的に日の浅い日本のAIRを守り、発展させていくためには、ネットワークとしてつながり、より強く、遅くその交流組織を構築する必要があることに目覚めたのである。

今、S-AIRは、日本におけるAIRとしての第二ステージを迎えようとしている。

本文は、筆者による寄稿文「日本におけるアーティスト・イン・レジデンスの成り立ちとその未来—16年間にわたるS-AIRの活動から—」（『芸術・スポーツ文化研究2』北海道教育大学発行、2016）から一部を抜粋し、再編集されたものである。

※1 荻原康子「アーティスト・イン・レジデンス」、インターネットサイト『AIR-J』, 管理団体：国際交流基金、(2015年10月6日)

※2 AIR\_J (<http://air-j.info/>)：独立行政法人国際交流基金が管轄する日本最大のAIRサイト。施設側も作家側も双方から情報を共有できるようになっている。

※3 2015年に民間の有志でスタートした十勝地区のアーティスト・イン・レジデンス。これまでに豊富町や浦幌町などで行われている。

※4 2014年より、登別市が中心となって行われているアーティスト・イン・レジデンス。

## 16 Years of S-AIR and Its Background

Hisashi Shibata, Director of NPO S-AIR

### The dawn of AIR movement in Japan

Generally speaking, the 1990s are known as the decade that established full-scale Artist-in-Residence (AIR) programs in Japan. <sup>(1)</sup> 1997 was an especially significant year, as it saw the Agency for Cultural Affairs introduce their Artist-in-Residence program project, proclaimed in May, in effect by July, and subsequently spreading all over Japan. In 1999, the third year of the project, S-AIR, formerly known as Sapporo Artist-in-Residence Committee, for which I served as director, was commissioned. According to my notebook, there were 12 programs nationwide in 1998 as the second year of the project and 15 programs commissioned in 1999. Currently, 59 registered programs are recognized in the framework of AIR-J <sup>(2)</sup>, excluding private AIR programs, which amounts to a five- or six-fold increase over a period of 16 years (as of December 2015). This indicates the AIR program has developed successfully.

### Birth of S-AIR and history of AIR in Hokkaido

Sapporo Artist in Residence Committee Board, the previous organization of NPO S-AIR, was established in 1999. This non-governmental organization was initiated by around 20 voluntary individuals who gathered at a private art space in Sapporo, including local artists, directors, managers in local museums, university professors and coordinators from community revitalization projects. Since its approval as a non-profit organization in July 2005, S-AIR has hosted a total of 84 artists from 34 countries and supported their artistic practice in the area of Sapporo city.

S-AIR, in effect a venerable member among domestic residency programs, is a non-governmental organization with full funding and is known as quite a rare institution. Originally S-AIR aimed to support visual artists, but it

expanded this ideology to work with curators and various species of creators including film directors and web designers. As I was committee chief in the beginning, and director at present, I have continuously been involved in working with and supporting artists at their production sites. For a long time, S-AIR was the only Artist-in-Residence in Hokkaido, the continuity of which qualifies it as a pioneering organization. In 2014, when the Sapporo International Art Festival was launched, Tokachi artist in residence (T-AIR) <sup>(3)</sup>, Noboribetsu artist in residence (N-AIR) <sup>(4)</sup> and Sapporo Tenjinyama Art Studio opened one after another, which expanded the variations of AIRs in Hokkaido, coinciding with the 15th year of S-AIR's operation (today it stands at 17 years).

Before the opening of S-AIR, I had several personal encounters with AIR projects in Hokkaido. In the late 1980s up until 1999 when S-AIR was established, I used to run an alternative art space with friends in Sapporo. In this space, artist talks and exhibitions were held several times by the AIR project of Villa Kujoyama in Kyoto. Through this experience and the connections it fostered, when S-AIR was opened, Sapporo Alliance Française invited AIR specialists including the director of Villa Kujoyama and Madame Emmanuelle de Montgazon, then-officer of Cultural Affairs at the Embassy of France in Japan. She gave an enthusiastic lecture about the history of AIRs in France, which I clearly remember until now. Furthermore, the art project "Ripple across the water" organized by The Watari Museum of Contemporary Art in 1995, which took place around Aoyama, Tokyo, was the first experience for me supporting an AIR project, though often spoken about under other categories than an AIR project. For this project, Jan Hoet, a then-leader of the art world, and who had been chief curator of Documenta IX in Kassel, selected more than a dozen Japanese and

international artists and provided living and production facilities for artists to produce site-specific works all over Japan. I supported in the production and accommodation of artists from Luxembourg, Netherlands and United States for 2 weeks in Sapporo. The term Artist-in-Residence was not recognized at that time, though I think this could be one of the origins of the AIR movement connecting to community revitalization projects, which has become increasingly popular nowadays.

### About S-AIR

From the beginning, the programming of S-AIR adopted a Western gallery model. Contributing reasons for this approach, which emphasizes the cultivation of experiences, came from the director's being American, relationships established with Western AIR institutions, as well as the scant funding from local government. However, with further expansion of space, the program was renewed with support and cooperation from the Sapporo Electronics and Industries Cultivation Foundation and Inter-cross Creative Centre in 2001. S-AIR joined the launch of the centre and received free office and studio space and support from the government over 10 years until the closure of the building in 2012. It then moved to a new location, and reorganized to manage as an independent non-governmental institution.

S-AIR has received financial support from the government, from non governmental organization, and from corporations to make up its budgets for programs according to certain conditions and times. However, at every period of time, we positioned ourselves to be independent, which is the most crucial fact. Frequently, most AIRs in Japan collaborate with the community revitalization sector of government, which is influential in some areas of AIR activities. However, being independent means being able to select artists without pressure from government. Furthermore, Japan has yet to develop an art industry dedicated to supporting and marketing, while S-AIR has been supporting artists with full-funding including apartment, studio, travel and exhibition

fees. Thus, it is a rather unique management model for an independent, non-governmental institution to cover the full budget of inviting artists over a long period of time.

### In Conclusion

As I mentioned, according to AIR-J, nowadays residency programs have increased to nearly sixty across Japan. This fact reveals not only positive sides. With growing numbers of such programs, each residency is in competition for funding, physical support and cooperation, as well as great artists. In our case, at the beginning of the program, we selected artists through open call submissions, however over the course of time, the quality of artists has changed. Thus, recently S-AIR has been in the process of building networks with overseas art centres and artists, some of which are not yet well recognized in Japan, such as Arts Catalyst in London, and Curators' Network in Europe, to produce high quality projects. Furthermore, domestically, we participate in AIR Networks Committee Japan initiated in Saitama in November 2015. We understood that in order to secure and develop the young history of Japanese AIRs, it is important to reestablish organization as well as to build tighter networks. Now, S-AIR is facing the second stage of AIRs in Japan.

The original text was written by myself on Establishment and future of Artist-in-Residence in Japan -16 years of S-AIR- in "Cultural Research of Art and Sports 2" published by Hokkaido University of Education, 2016, later edited for this booklet.

(1) Yasuko, Ogiwara. Japan's Artist-in-Residence Programs. Internet site "AIR-J" organization: Japan Foundation, Oct, 6th, 2015. <http://en.air-j.info/resource/article/now00/> (English)

(2) AIR-J (<http://air-j.info/>) is the biggest AIR website, run by the Japan Foundation. Through this website, both artists and organizers share information.

(3) Artist-in-Residence in Tokachi area in Hokkaido was launched in 2015 with local private volunteers. Programs have been held in Toyokoro town and in Urakawa town.

(4) Artist-in-Residence in Noboribetsu was established in 2014 and is organized by the city of

# AIR CAMP 2015 講師プロフィール



ディン・Q・レ Dinh Q. Lê

アーティスト、San Art 理事長・創設者  
Artist, Chair and Co-founder of San Art  
\*Portrait: Tyuki Imamura

1968年、ベトナム、ハーティエン生まれ。ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアルアートで写真と関連メディアを勉強、修士号を取得する。

彼の作品は世界各地で紹介され、森美術館やMoMAでの個展開催、多数の国際芸術祭にも参加している。アーティストとして活動の傍ら、ベトナム・アート・ファンデーションを共同設立、またベトナムで最も活発な非営利ギャラリーとレジデンスの施設であるサン・アートを共同設立した。現在、アーツ・ネットワーク・アジア、アジアソサエティー・グローバル・カウンシル、グッゲンハイム・アジアカウンシルの役員。2010年プリンス・クラウス基金のヴィジュアル・アート賞受賞、2014年ロックフェラー財団ベラジオ・フェロー。



リノ・ヴース Lyno Vuth

アーティスト、キュレーター、研究者、Sa Sa Art Projects アーティスト・ディレクター  
Artist, Curator, Artistic Director of Sa Sa Art Projects

アーティスト集団 Stiev Selapak、SA SA BASSAC gallery の共同設立者。メルボルンRMIT 大学にて、インフォメーション・テクノロジー（学位）と社会科学（修士）を学び、フルブライト奨学金によりアメリカにて美術史（MFA）修了。White Building と呼ばれる存続の危機が危ぶまれる歴史的な地域に所在する、カンボジアで唯一のアーティスト・ラン・スペースである Sa Sa Art Projects では、カンボジアのコミュニティとその特有の文化を結びつけるような制作やキュレーションを行う。



小田井 真美 Mami Odai

さっぽろ天神山アートスタジオ ディレクター  
AIR 勉強家  
Director at Sapporo Tenjinyama Art Studio,  
a diligent student of artist residencies

1966年広島生まれ。武蔵野美術短期大学、女子美術大学卒業。3ART PROJECT（東京青山）を経て、2001～2002年にとから国際現代アート展デメテル事務局（帯広、北海道）に勤務する。2003年よりNPO 法人S-AIR（札幌、北海道）に所属し、アーティスト・イン・レジデンスの運営、アートプログラムによる地域活性化事業、アーティスト・イン・スクールの企画、Sapporo2 Project のプロデュースを担当。2010年より2年間茨城県アークスプロジェクトのディレクター、札幌国際芸術祭2014のチーフプロジェクトマネージャーを務める。アーツ千代田3331と日本国内の新しいAIRのネットワークと巡回型AIRの可能性を高めるポータルサイトMAJなど、国内外のAIRについてのリサーチ、アーティスト及び国内のAIR事業立ち上げを支援する活動も行う。



日沼 慎子 Teiko Hinuma

陸前高田AIRプログラム プログラムディレクター、  
女子美術大学准教授  
Program Director of Rikuzentakata AIR  
Program, Associate Professor at Joshibi  
University of Art and Design

1969年青森県生まれ。女子美術大学芸術学部卒業後、ギャラリー運営企画会社、美術雑誌編集者等を経て、国際芸術センター青森設立準備室、同学芸員を務める。  
アートサポート組織「ARTizan」プログラムディレクター。アーティスト・イン・レジデンスを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画、運営。



田口 幹也 Mikiya Taguchi

城崎国際アートセンター館長  
広報・マーケティングディレクター  
Director and Head of Marketing and Communication  
at Kinosaki International Arts Center

1969年兵庫県生まれ。1992年上智大学法学部卒業後、東京で職を転々（サッカー専門新聞の創刊やネットビジネスの創業に携わる）した後、2011年の東北大震災を機に豊岡市に帰郷。「おせっかい。」として豊岡市のPRに携わる。2015年4月より城崎国際アートセンター館長兼広報・マーケティングディレクターを務める。



林 曉甫 Akio Hayashi

特定非営利活動法人インビジュアル  
マネージング・ディレクター  
Managing Director at NPO inVisible  
Portrait: Ryuichi Maruo

NPO 法人 BEPPU PROJECT にて公共空間や商業施設などでアートプロジェクトを展開し、文化芸術を通じた地域活性化や観光振興に携わる。2015年7月に特定非営利活動法人インビジュアルを設立し、現職。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界2012」事務局長（2012、大分）、六本木アートナイトプログラムディレクター（2014、2015、東京）、鳥取藝文祭総合ディレクター（2014、2015、鳥取）



柴田 尚 Hisashi Shibata

特定非営利活動法人 S-AIR 代表  
北海道教育大学教授  
Director of NPO S-AIR, Professor at Hokkaido  
University of Education

平成11年札幌アーティスト・イン・レジデンスを立ち上げ、平成17年7月、特定非営利活動法人S-AIRとして法人化。初代代表となる。現在までに34カ国84名以上の滞在製作に関わる。同団体は平成20年度の国際交流基金地球市民賞を受賞。その他、「SNOWSCAPE MOERE」をはじめ様々な文化事業を企画する。平成26年より、北海道教育大学教授となる。NPO 法人アートNPO リンク理事、Res Artis 総会2012実行委員会委員、共著に「指定管理者制度で何が変わるのか」（水曜社）、「廃校を活用した芸術文化施設による地域文化振興の基本調査」（共同文化社）がある。

# AIR CAMP 2015

受付は→  
左奥の交流スペース



201

Day  
1  
12.11 fri

REPORT

## アーティスト・イン・レジデンスとは？

1. レクチャー 日本のAIRの現在と課題について  
柴田 尚 (S-AIR)

2. AIRの今・国内の実例から

それぞれの講師が関わってきたAIRプログラムの実践を紹介し、日本各地で現在進行中のAIRの形について、参加者と共有を図った。

- 田口 幹也 (城崎アートセンター)
- 日沼 慎子 (国際芸術センター青森・ACAC、陸前高田AIR)
- 林 曉甫 (BEPPU PROJECT、鳥取藝文祭)
- 小田井 真美 (天神山アートスタジオ)
- 橘 匡子 (S-AIR)

AIRの運営に関しては、アーティストの滞り場所の有無、行政との関わり、企業や地域からの協力など運営主体によって様々である。

欧米で行われている留学をベースにしたAIRと比べると、日本では自治体为主导するまちづくりと連動した文化事業として行われることが多い。自治体の立場や補助金の種類によっても事業が性格付けされやすい傾向があり、動機や目的などをアーティストと主催者がすり合わせていく作業が重要になる。



## 「小さな世界都市」へ 豊岡の挑戦

田口 幹也（城崎国際アートセンター館長、広報・マーケティングディレクター）

城崎国際アートセンター（以下KIAC）は、兵庫県豊岡市の温泉街に位置する舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスの拠点です。最大700人収容可能なホール、6つのスタジオ、22名が宿泊可能なレジデンスで構成され、舞台芸術の発表の場としてだけでなく、アーティストがまちに暮らすように長期滞在できるアートの拠点として2014年にオープンしました。

KIACでは年に1回の公募によって選ばれたアーティストやカンパニーを受け入れ、年間を通してアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを行います。

アーティストは最短3日～最長3か月の間、KIACに滞在して24時間自由に創作活動ができ、その間の宿泊費やホール、スタジオ使用料は無料となります。

2015年度からKIACの芸術監督に就任した平田オリザ氏は、市の芸術文化参与も兼任しており、コミュニケーション教育推進事業として、市内の小中学校で演劇的手法を用いた授業を実施しています。また、ダンスの体験も含め、舞台芸術に触れながら、コミュニケーション能力の育成を図っていく授業を今後3年以内に市内30の全小中学校で行うことも決まっています。KIACに滞在す

るアーティストもこのプログラムに積極的に参加してくれることを市では期待しています。

KIACでは滞在アーティストには作品の完成は義務付けてはいませんが、無料でのワークショップや練習・リハーサル公開など地域交流プログラムとして市民が芸術に触れる機会の提供を義務付けています。人口85,000人の豊岡市では、舞台芸術の公演事業を頻繁に行うことは市場規模、コストを考えると難しいでしょう。しかし、公募という形で世界中からアーティストを募集し、自らの意思でアーティストに豊岡市に来ていただくことにより、市民は一流アーティストの作品を観劇するだけでなく、創作現場や途中過程に触れる、また授業やワークショップに参加するなど様々なレジャーでアートに触れる機会をえることができます。

こういった活動により市の文化資本が蓄えられ、魅力的な教育プログラムも整備されていき、まちとしての魅力が増すと考えています。

豊岡市は「小さな世界都市」を掲げ、地方の小さな都市（まち）であっても、世界の人々に尊敬・尊重されるまちを目指しています。

アートを通して世界と出会えるまち“KINOSAKI”。小さな世界都市を目指す豊岡の大きなピースとなっています。



©Madoka Nishiyama



©Madoka Nishiyama



## The Challenge of Toyooka: To Be a Local and Global City

Mikiya Taguchi, Director and Head of Marketing and Communication at KIAC

Kinosaki International Arts Center (KIAC) is an Artist-in-Residence specialized in performing arts, located in the middle of the hot spring town of Toyooka, Hyogo prefecture. The center has a 700 capacity main hall, six studios and seven guest rooms for up to 22 guests. It opened in 2014, with the aim of providing the facilities and environment to showcase the performing arts as well as to support artists who wish to concentrate on their creative activities for longer periods of time. KIAC runs a residency program throughout the year and selects artists and companies from open call applications once a year. Artists can stay at the center for a minimum of three days to the maximum of three months, with no facility charges or accommodation fees, and facilities are available 24 hours a day.

Along with the residency program, the educational project was started as part of a communication and educational promotion project in partnership with the city. The new artistic director from this year, Oriza Hirata who is also a city councillor for arts and culture, organized a performing arts programs for elementary to junior high school students throughout the city. Over the next 3 years, the program offers to teach children communicational skills through the performing arts such as dance performances in 30 different elementary and junior high schools. The city of Toyooka is expecting visiting

artists to willingly participate in this program as well.

KIAC has no requirement for artists to submit final works, though it requires artists to participate in the community program, sharing artistic experiences with local residents through events such as free workshops and open rehearsals.

With the city's population of 85,000, it is difficult to manage frequent performing arts projects considering the scale of the markets and the costs. However, what is amazing about holding open calls is receiving applications from artists all over the world; their visions point toward numerous opportunities to encourage local residents to access art in various ways. It is not only as an audience of the world's top level artworks, but also to be part of production processes, and participating in workshops and lectures.

Overall, Toyooka city will build cultural capital through these projects and will develop a structure of fascinating educational programs, which, in effect, makes our city very attractive. Toyooka is aiming to be respected and valued by people around the world under the slogan of 'Toyooka: a Local and Global City'. Kinosaki is the town where we can meet the world through art. Therefore, KIAC is an important facet of the effort to build Toyooka as a local and global city.

## 記憶の風景、なつかしい未来へ

日沼 禎子（陸前高田AIRプログラム プログラムディレクター、女子美術大学 准教授）

2011年3月11日の大震災から、間もなく5年が過ぎようとしています。私たちにとって5年という月日は、決して短い時間ではありません。誰にとっても等しく降り注ぐ5年間のあいだに、多くのものを失い、そして出会い、悲しみに引き戻されながらも、それでも前に向かって生きていかなければいけない時間。誰にも止めることのできない、その時間の中には、遠く太古の祖先から引き継がれてきた記憶が宿り、今を生きる私たちへと繋がれています。陸前高田AIRプログラムがめざすものは、そうした人々の記憶の風景、失われた、あるいは見えざる時間の存在を見つめ、紡ぎだし、小さな断片をつなぐように現していくことです。

運営母体となる「なつかしい未来創造株式会社」は、陸前高田の経営者を中心に、岩手県中小企業家同友会、一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワークの協力を得ながら進める「復興株式会社」として、2011年10月に設立。「良い社会資本を未来へつなぐ」ことを目的に、地域の社会資源を活かしながら、社会の今日的課題に答える地域ビジネスのあり方を考え、将来的に、約500名の雇用をめざし、複数の事

業を育成、10年間で発展的に解散する予定です。この陸前高田AIRも、このミッションに沿いながら、この地の文化を考え、そして、未来に繋ぐ役割を担っています。

2013年にはじめたこのささやかな活動にも、3年間という時間が堆積しました。これまで、ウェールズ、オランダ、フィリピン、タイ、ドイツの各国から、写真、映像、立体、ダンス、また、ソーシャルエンゲージの視点で活動するアーティストが約1〜2ヶ月間、陸前高田市に滞在し、人々の生活に寄り添いながら、大切な記憶を拾い上げ、記録し、伝える活動を行なって参りました。仮設住宅で暮らす人々の日常や変わりゆく風景を記録するもの、伝統芸能の中にある身体と記憶とコミュニティの成り立ちについて深く考察するもの、あるいは新たなコミュニティのつながりの場づくりを試みるなど、それぞれが場と人々と出会い、自ら行動するという事を基本に活動を展開しています。これらの試みはまだ始まったばかりです。これから何をすべきか、あせらず、ゆっくりと、深く考えながら活動を継続していきたいと考えています。



©Jun Matsuyama



©Madoka Nishiyama



©Jun Matsuyama

## Landscape of Memories and Reminiscent Future

Teiko Hinuma, Program Director of Rikuzentakata AIR Program, Associate Professor at Joshibi University of Art and Design

Soon, five years will have passed since the devastating earthquake of March 11th, 2011. Definitely, the past five years have not flown by for us. While time has flowed equally for everyone, some people have experienced huge losses, some encounters, or withdrawals into great sorrow. Even so, time creeps up to them, forcing them to live toward the future. Time cannot be stopped. Meanwhile, memories handed over by ancestors from ancient times, we dwell on them and carry them on with us, we who live in this moment. The aim of Rikuzentakata AIR program is to acknowledge these people's memories in landscapes, lost or invisible time, and to actualize them as artistic practices with the general public, putting them in motion like spinning yarns bringing their strands together.

The Reminiscent Future Creation Co. Ltd., is the main organization running this AIR program, established in October 2011, as a community regeneration company supported by business owners of Rikuzentakata as well as Association of Small Business Entrepreneurs of Iwate Prefecture and Social Business Network, a general incorporated association. The aim of this company is to collect positive social capital for the future by activating local social resources and highlighting local business models that address problems of contemporary society. In the future, it plans to employ 500 people, to grow several businesses and would

eventually dissolve in 10 years. Along with this mission, Rikuzentakata AIR plays a role in reflecting on local cultures and passing them on to the future.

Since 2013, three years have built up with our little programs. Artists practicing photography, video, sculpture, dance performance and social engagement from Wales, the Netherlands, the Philippines, Thailand and Germany had stayed in Rikuzentakata city for 1 to 2 months. During these periods of time, artists had gathered important memories of people, and recorded and conveyed their experiences by planting themselves in the lives of residents and willing these lives to be their own. Some artists documented the everyday experiences of temporary housing and landscape changes, some researched and contemplated physicality, memories and the establishment of traditional performances, and some undertook to create platforms for new communities and their networks. Rikuzentakata AIR program supports individual artists to discover places, encounter people and reflect these within their art practices.

These attempts have only started. We profoundly contemplate what we have to aim for, with a slow attitude, without rushing to an answer.

Day  
2  
12.12 sat

REPORT

## 市内見学ツアー

### S-AIRのAIRプログラムに関する札幌市内の施設見学

#### SIAFラウンジ

札幌市資料館が札幌国際芸術祭2014の会場となったことをきっかけに、次回の芸術祭の開催に向けた新たな活動拠点として、2015年4月28日からオープンした。過去の芸術祭の記録物や、関連書籍の閲覧もできる。多くの市民が芸術に触れて、理解を深めるきっかけを提供すべく、展覧会やレクチャーなど、さまざまな活動を行っている。



#### Makers' Base

2015年にオープンした会員制のシェアスタジオ。幅広い分野の機器を有しており、専門のスタッフから指導を受けることでそれぞれの機器を使用することができる。滞在中のアーティストがスタジオとして利用して作品を制作し、展覧会の準備を行うこともある。



#### 500m美術館

地下鉄の駅施設内に設置された展示スペース。通路に沿った長いスペースが特徴で、地下鉄利用者などの一般市民が美術作品に触れる機会を提供している。2012年より2年間、S-AIRが展覧会の企画・運営を担当した。



#### HUG

北海道教育大学が運営するアーツ&スポーツ文化複合施設 (Hue Universal Gallery / 愛称HUG)。美術展や音楽会、講義やワークショップ、イベントなどを通じて地域の人たちとの連携や協力を図る。この期間中はS-AIRの秋期レジデンスプログラム招聘アーティストによる展覧会が行われた。



Makers' Base  
Personal Brand Supporter

Day  
2  
12.12 sat

REPORT

## S-AIRの招へい作家展覧会場での ギャラリーツアー

S-AIRの秋期レジデンスプログラムで招聘したアーティスト、アンディー・シュミートと、キュレーターのアンカ・ミヒュレットによるギャラリーツアーが行われ、札幌での滞在の様子やリサーチの成果などを紹介した。

#### [展覧会概要]

S-AIR 2015 -FRONTIER-  
秋期レジデンスプログラム  
アンディー・シュミート展

2015年12月5日ー 12月16日

12:00-20:00

会場／北海道教育大学  
アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG



Day  
2  
12.12 sat

REPORT

## アフター AIR モニカ・ソスノフスカによるレクチャー

2002年にS-AIRのプログラムに参加し、滞制作を行ったモニカ・ソスノフスカによるレクチャーが、聞き手に北海道立近代美術館主任学芸員の穂積利明氏を迎えて行われた。当時の思い出や、その後どのようにしてアーティストとしてのキャリアを積み重ねていったのか、また、アーティストにとってのAIRに参加する意義について話した。



札幌大通  
500

Sapporo Odori 500-

Day  
2  
12.12 sat

AIR CAMP 2015 : ASIA FORUM

## ピサオット・プログラム

(ササ・アート・プロジェクト／カンボジア)

### Pisaot Programme

Sa Sa Art Projects, Cambodia

ササ・アート・プロジェクトは、実験的なアート活動の実施を目的としたブノペン  
の唯一のアーティスト・ラン・スペースである。2010年にカンボジアのアーティ  
スト集団Stiev Selapakにより設立され、ホワイト・ビルディングと呼ばれる歴史  
のある賑やかな集団居住地为拠点としている。

ピサオットは地域における対話に焦点を置くレジデンスプログラムであり、展覧  
会に向けた制作をすることを目的としていない。ササ・アート・プロジェクトが奨  
励しているのは、双方向的に知識を共有することだ。アーティストたちが何につ  
いて調査するかは自由だが、ホワイト・ビルディングそのもののヤブノペンという  
地域と何らかの形で関わることも促進している。

AIR CAMP 2015の一環として、ササ・アート・プロジェクトとササ・バサックとの連携  
により、S-AIRは、カンボジアのアーティスト、ソパル・ネを2016年2月～3月の2ヶ月間  
招へいを行った。

Sa Sa Art Projects is Phnom Penh's only not-for-profit artist-run space  
dedicated for experimental art practices. It was founded in 2010 by the  
Cambodian arts collective Stiev Selapak and is located in a historic and  
vibrant apartment complex known as the White Building. Sa Sa Art Projects  
runs an experimental arts residency program, Pisaot, which focuses on  
regional dialogue, but does not ask artists to make work for an exhibition.

Sa Sa Art Projects promotes a two-way knowledge sharing. Whilst visiting  
artists have freedom to research for their personal projects, they are also  
encouraged to engage with the public and the community at the White  
Building or in Phnom Penh in various ways.

In partnership with Sa Sa Art Projects and SA SA BASSAC gallery, S-AIR hosted  
a Cambodian artist, Sophal Neak, who took part in a 2-month residency in  
Sapporo from February to March 2016 as part of the AIR CAMP 2015.



Photograph: Sa Sa Art Projects

Day  
2  
12.12 sat

REPORT

## AIR CAMP 2015に参加して Reflection on AIR CAMP 2015

リノ・ヴース(ササ・アート・プロジェクト)

Lyno Vuth, Artistic Director, Sa Sa Art Projects

アーティスト・イン・レジデンスに関わる人たちが一同に集まり、より効果的で面白い  
プログラムを企画し実施できるように、AIR CAMPのようなプラットフォームを設ける  
ことは非常に有意義であると感じた。日本国内の参加者や、私と同じくベトナムか  
ら講師として招へいされたサン・アートのレ氏と共に、多くを学ぶことができた。

日本では、「AIR」という言葉が一般的に使われるほど、アーティスト・イン・レジ  
デンスのモデルが確立されていること、そして事務的な役割から宿泊やスタジオの場  
所、国からの助成金への申請に至るまでを行う非営利団体が日本中にたくさんあ  
ることが非常に面白い発見だった。カンボジアではアーティスト・イン・レジデンス  
という仕組みは比較的新しいので、これまでにいくつか存在しておらず、今も  
続いているのはひとつだけであり、その場しのぎの対応しかできていない状況だ。

アーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストやアート関係者のコミュニティーに  
適した有益なものであり続けるために発展させていかなければいけない。それぞ  
れのプログラムが意識的に、地元の情報、資源、文脈に応じながらそれらを活用  
し、創造的なアーティスト・イン・レジデンスの取り組みを促進すべきだと感じる。

It is very beneficial for having a platform like AIR CAMP where people can  
come together to share experience and think about new strategies to  
design and run even more effective and interesting artist-in-residence  
programs. I enjoyed learning from other participants from Japan and my  
colleague from San Art, Vietnam.

It is so interesting that artist-in-residence model in Japan is so established,  
even called AIR, and there are many non-profit institutions who run and  
support AIR program across Japan: from administering institutions, to  
dedicated accommodation and studio space, to government support.  
Artist-in-residence is a relatively new model for Cambodia and there are  
currently barely a few residency programs including only one committed  
ongoing program. We are more of in a makeshift approach for resources;  
we do with what we have.

I think artist-in-residence model should evolve for it to continue to be relevant  
and useful for the artists and artistic communities. Each program should be  
conscious about and adaptive to its local knowledge, resources and context; use  
them as opportunities for fostering a creative artist-in-residence engagement.

Day  
2  
12.12 sat

AIR CAMP 2015 : ASIA FORUM

## サン・アート・ラボラトリー

(サン・アート／ベトナム)

サン・アート(「サン」はベトナム語で「プラットフォーム」の意)は、ベトナムにおける現代美術や文化に関する資源や機会が非常に少なかった状況を受け、2007年10月に設立された。商業的な生産以外の創造活動やそのインフラがないに等しいベトナムのような国では、自分たちの声をあげるために、アーティストたちは創造活動を戦略的に行わなければならない。

そのような状況でも、ベトナムに多くのアーティストたちが活動を始めていたことから、2012年半ばに「サン・アート・ラボラトリー(研究所)」を立ち上げ、スキルアップを促し、コミュニティを拡げることを目的に、プログラムの参加者3名に6ヶ月間の活動金と場所を提供し、それぞれの参加者＝「レジデント(滞在者)」にひとりずつ「話し相手」を設けた。「話し相手」は被験者、対談者の役割を持ち、「レジデント」の関心分野における専門家でもある。「話し相手」には、アーティスト、建築家、人類学者がなることもある。参加者は、講義やワークショップ、合同批評会に参加することが必須であり、6ヶ月の最後に開催される展覧会に向けて新しい作品の制作を行わなければならない。2014年には、参加対象者を東南アジア全域に広げ、ベトナム国内と東南アジアから公募を行い、国内外からの審査員がすべての申請の審査を行った。

2015～16年のセッション8の最中に、政府の監査が厳しくなったことから、「サン・アート・ラボラトリー」はプログラムの改正が迫られる事態となり、残念ながらセッション9以降はキャンセルせざるを得なくなった。今後の状況については、随時状況を発信する予定だ。

AIR CAMP 2015の一環として、サン・アートとの連携により、S-AIRは、ベトナムのアーティスト、チュアン・トランを2016年2月～3月の2ヶ月間招へいを行った。



Photograph: San Art

Day  
2  
12.12 sat

AIR CAMP 2015 : ASIA FORUM

## San Art Laboratory

San Art, Vietnam

San Art ('san' meaning 'platform') was established in October 2007 in response to the great lack of resources and opportunities concerning contemporary art and culture in Vietnam. In a country that offers little in the way of infrastructure and few alternatives to commercial production, artists must be strategically creative in order to be heard.

'San Art Laboratory', initiated in May 2012, focused on the critical growth of Vietnamese artists in such a context, providing 3 artists for 6 months with funds and space with which to expand their limited training and community, appointing a 'talking partner' to each 'resident'. A 'talking partner' is a soundboard, an interlocutor, someone with expertise of relevance to the resident's interests. They could be an established artist, architect, anthropologist etc. Each artist is expected to participate in San Art's lecture and workshop program, participate in group-critiques and produce a new body of work for exhibition at the end of each 6 months. In 2014, this program was opened up to broader South East Asia. Applications are sought via Open Call across Vietnam and South East Asia. An international jury assesses all applications.

During Session 8 (December 2015-May 2016), due to the increase in government scrutiny of San Art's programs, 'San Art Laboratory' needs to re-strategize the program and thus regrettably has to cancel Session 9 onwards. We will keep the community posted with further developments.

In partnership with San Art, S-AIR hosted a Vietnamese artist, Tuan Tran, who took part in a 2-month residency in Sapporo from February to March 2016 as part of the AIR CAMP 2015.



Photograph: San Art

## アーティスト・イン・レジデンス への期待

林 暁甫（特定非営利活動法人インビジブル マネージング・ディレクター）

今回 AIR キャンプ2015に参加させて頂き、これまでやってきたアーティスト・イン・レジデンスの取組や、どのようなことを考えながら取組を行っているのかという話をさせて頂いた。

AIR キャンプ2015には、札幌という遠方（失礼!）にも関わらず国内の様々な地域から参加者が集まることに非常に驚かされた。同時に、こんなにも多くの地域でアーティスト・イン・レジデンスが行われている（または計画されている）ということは、様々な形でアーティストが必要とされている状況があるということだと実感した

国内で行われている小中規模のアーティスト・イン・レジデンスの環境が良くなることは、そこで活動するアーティストにより良い機会を提供することに繋がるだけに、AIR キャンプのような取組は継続して展開されるべきだろう。このような機会は、実務面での学びの機会だけでなく、共通の課題について話し合うことで新たな視点で自分たちの取組を認識することにつながるだろう。加えて、参加者同士が協働してレジデンスの機会を立ち上げるなど、共同プロジェクトが生まれる可能性があることも魅力だ。

ただ、短期間の取組ではできないこともあるため、それを補うためには、例えばオンライン上でディスカッションができるような環境をつくったり、不定期でのオンラインミーティングを開催したりするなど、ネットワークをより太くすることも検討してもいいかもしれない。

もう一つ。先日、Trans Cultural Exchange で Executive Directorを務めるメリー・シャーマン氏を鳥取県内のアーティスト・イン・レジデンスに案内した際、「こうした環境でのレジデンスなら海外のアーティストが自分でファンドレイズしても参加したいと思う」ということを言われていた。海外への発信と受入れは、今後各地のアーティスト・イン・レジデンスを発展させる上で一つの重要なポイントであると思う。

多様な形態のアーティスト・イン・レジデンスが国内各所で立ち上がることで、「アーティスト」という役割が社会に新たな価値や視点を生み出す存在として認知されていってほしい。



TOTTORI GEIJU FESTIVAL



TOTTORI GEIJU FESTIVAL

## Expectation of Artist-in-Residence

Akio Hayashi, Managing Director at NPO inVisible

As I was one of the lecturers of AIR CAMP 2015, I presented my experiences in some artist-in-residence programs including the topics of what we program and how we manage projects.

Although Sapporo is quite removed (sorry!) from other parts of Japan, a surprising number of participants travelled across the country. During this workshop, one astonishing fact for me was the number of residencies existing and in planning stages everywhere in Japan, which reveals that artists are highly demanded for various projects and circumstances.

The workshop offered an opportunity to learn and share practical issues, common questions and problems, which brings new perspectives into each residency's reflections on their own practices moving forward. Developing a better environment for small to medium scale domestic residencies would in effect support artists to have improved creative conditions. Furthermore, through the networks of participants, it is fascinating to imagine developing collaborative projects as well. In that sense, a program like AIR CAMP should be continued.

However, this program is short enough that it cannot cover questions on longer term outcomes. To compensate, I suggest creating a platform for online discussions, or holding irregular online

meetings to build further and stronger networks between the organizations.

Finally, when Mary Sherman, executive director of Trans Cultural Exchange was visiting Tottori, I took her around to some local residence programs in this prefecture. She mentioned, artists would love to participate and even fundraise their own budget if these amazing environments and programs are provided. I think one of the key issues to advance local artist-in-residence programs for the future, is to make connections and receive artists from overseas.

Through the establishment of various residencies across Japan, it is important that artists are recognized in their crucial role of bringing and implanting different values and perspectives into our society.

Day  
3  
12.13 sun

# REPORT

## グループ・ディスカッション



講師を交えたディスカッションをラウンドテーブル形式で行った。  
まずは最初に、今抱えている問題点や知りたいこと、今後の課題などを、参加者ひとりひとりに一通り挙げてもらった。  
その後、それを踏まえて、「ミッション」「ファンディング」「コミュニケーション」「評価」の4つテーマに絞り、講師を中心としてグループごとに多様な意見交換が行われた。

### ミッション Mission



### ファンディング Funding



### コミュニケーション Communication



### 評価 Evaluation



## AIRの未来

小田井 真美（AIR勉強家、さっぽろ天神山アートスタジオ AIRディレクター）

アーティスト・イン・レジデンスは、アーティストの育成や活動支援が目的なので、アート業界の基盤整備のしくみ、インフラである。

いまこのただのひとつの分野のインフラが、社会の中で複数のポジティブな効果を引き起こす（可能性がある）として、期待され、注目が高まっているようだ。

*私は一介のAIR勉強家にすぎないので、「日本では」、とことわりを挿入する。*

それは、AIRを事業化するとき、つまり予算付きで「アーティスト育成/活動支援」が計画され、なされるときに、AIRをやりたいけれどシンプルに「アーティスト育成/活動支援」だけでは、世間的に通らないからほかの目的をくっつけるという状況があるのではないかと考えている。日本においては、芸術文化という分野自体が、一部の愛好家、特定のグループの中で取りざたされるしるものだと思われるからだ。

*日本以外はどうか、いまはこの議論はにおいて。*

芸術文化分野の中で、そのコミュニティに属している人にとっては飽き飽きするほどの「常識的見解」である。ここ10年で、そのコミュニティど真ん中で、さらに「アーティスト育成/活動支援」の領域に関わる人の中で目先の利く人たちは、この現実を克服するためにいろいろな理由をつけて世間の目をくらましてきた。

*なぜここまでして「アーティスト」を大切にするのか、それは素面では語らない方がよい話題だ。さもありなん、それぞれの事情だし、私の場合も秘すれば花である。*

その代表的な方法は、日本において文化事業の主なスポンサーになる行政が安心して予算を供出できる「地域振興やコミュニティ再生」という目的である。しかし、10年が経過すると目にみえる成果をあげる事業も出てきた。嘘からでたまこと、である。または一念岩をも通す、であろうか。

また先人らの思い切った割り切りを後押ししたのが、同時に表舞台に登場したアートプロジェクトや、地方での国際芸術祭事業が多発してきたことである。

いずれも、アーティストと従来の文化芸術事業の主権者や作り手とはタイプの違う人々との組み合わせで事業化がされることも増えた。過去は、文化芸術事業は、アーティストと分野の専門家によってつくられていた。つまり厳しくみるとコミュニティの中でことが起こってそこで終わっていた。ところが、アートプロジェクトや国際芸術祭事業は、分野の専門家じゃない人々も運営や意思決定に加わる。つまり「アーティストの育成/活動支援」の目的とは別の目的が、ことのなりゆきと狭間に入る余地ができ、また複数の目的の優先順位が入れ替わりもする。どういう状況であれ、それらのケースすべてに「アーティスト」が関与しているという共通点がある。

*私はアートプロジェクトには「アーティストが必要不可欠だ」と考えている立場だ。*

そこに異分野の人、異なる背景や目的をもった人同士が分かり合えたり、確かめ合ったり、分かち合えたりできる一縷の望みがあるのではないかと思うようになった。つまり、いずれの目的であっても「アーティストは不可欠な要素」であり、社会から排除されたり無視されたりする対象ではない。その事業者にとってだれを「アーティスト」をするのかも、またそれぞれである。ともかく、アーティストが世の中で他の人と同じように大手をふって生きていける状況が整ってきたといえる。そして、だから考える「アーティストを育成すること、アーティストの活動を支えることの意味とは？」私たちはアーティストに何を期待しているのだろうか、と。目的が多様化したいまだからこそ、この核心をアーティストに向けて表明できるかどうか、AIR事業者の生き残りになるのではないかと感じている。なぜなら、事業者がアーティストを選ぶのではなく、アーティストが事業者を選ぶのだから。かつて「触媒」の役目をしていてアーティストをミツバチに例えたのは、S-AIR柴田氏である。ミツバチにとって魅力的なお花かどうかということだ。いま日本中にたくさんのお花が咲き乱れている。ミツバチが一匹もってこない花だとしたら、なにも起こらない。種は受け継がれず花は一度咲いて終わってしまう。未来につながらない。種を残そうとするなら、さあ、どうしたものか？

ほかに花の咲いていない場所で咲く、やたらでかいとか、やたらよい香りとか、色が派手とかでほかの花より目立つ工夫をする、うっかり留まったらしっかりキャッチするように進化する、ほかの花と群れてお花畑をつくる、とか？

*う、しまった！SMAPのヒット曲がぐるぐる回る。*

「AIRの未来」というお題が与えられた時にはこんな陳腐な答えを書きたかったわけではないけれど、やはり個性を発揮する、独自性を磨く、ということにつける。テクニカルなアドバイスや、成功していると言われているところの後を追っても、背景も哲学も目的も異なるのだ、同じようにできるはずはない。オランダで世界のレジデンスの研究をしていた時に実感したことは、この世にはアーティストは山ほどいる、ということだった。自分で想像するよりもはるかに多くのアーティストといわれる、自覚して活動する人々がいる。いまは外野が賑やかでうっかりすると忘れてしまうけれど、これだけだ、「アーティスト・イン・レジデンスはアーティスト抜きには始まらない」。そして、「アーティストはなにを求めているのか、どうすれば彼らの活動を支えることができるのだろうか、そのためになにができるのか」という自問自答と前進だ。案ずることはない、世の中にアーティストがいる限り、この仕事は続く。自信をもって、最良のレジデンスであろうとがんばっていれば、ミツバチが世界の果てから、または同じ土地からやってくる。そしていろんな花が咲くこと、それがAIRの未来である。そして、この多様性こそがしなやかで強い基盤をつくる。

## Future of Artist-in-Residence

Mami Odai, a diligent student of artist residencies, Director at Sapporo Tenjinyama Art Studio

Artist-in-residence programs are part of an infrastructure, a component in a maintenance system of the art industry, whose intention is the education and support of artists.

That is, they are the one and only infrastructure in this field which insofar as possible, leads to various positive effects in society, and which has recently attracted and received high expectations from the general public.

*By the way, I must disclose that I am merely a diligent student of artist residency, and that this perspective is limited to Japan.*

I think one of the reasons I say this with such hyperbole is that when developing a residency project—including crafting plans and prospects to educate and support artists with official budgets—an organization will tend to magnify the objective of a residency program in order to convince the public. In other words, the straightforwardly expressed concept, to educate and support artists, would not be accepted by society. Unfortunately in Japan, the discourse of art and culture is considered to be valuable only within specific circles of art lovers or supportive peer groups. This is a repetitive, common opinion in our community.

*Here, I must forgo a discussion of this dynamic in other countries.*

Seeking to overcome this situation, directors and managers of in the art world, in the field of education and artistic support, especially those who are farsighted, gave the public a slip by adding various reasons to the concept over the past 10 years.

*Why do art directors and managers defend artists with such effort? I suppose it should not be discussed without getting drunk. But as you may know, the answer is varied and for me, the hidden reason is more beautiful than that which is exposed (if you hide the secret behind the art, you can fascinate the audience.*

One of the most typical and best methods that governments, as they become sponsors for most cultural projects in Japan, secure budgets is without doubt to amplify the objective by adding to the list of benefits the local regeneration and revival of a community. Many a true word is spoken in jest, or perhaps it shows that faith can move mountains; some projects following this logic have resulted in obvious consequences over the last 10 years. Furthermore, some practices such as project-based art's leading role in social and community programs, and the frequent occurrence of international art festivals outside of cultural capitals, have pushed AIR initiators' radical approaches forward.

In any case, the recent trend is that art projects are organized by people from various fields, not only from the art and cultural sector. In the past, art and cultural projects were persuaded into existence by artists and professionals in the art world; in short, from a critical point of view, things would just happen and finish within the same community. On the other hand, current art projects and international art festivals allow various people outside of art to be involved in decision making processes. As a result, different motivations other than education and artistic support have slipped into the course of events and by

doing so, the priorities and purposes have been switching around. Regardless of the situation, in any case, artists are involved.

*I take the position that the artist is essential for an art project.*

I started to think that the fact that artists are essential for an art project reveals a ray of hope. People working on art projects from a range of disciplines and perspectives, share and discuss problems and opinions. That is to say, an artist is an indispensable element for any types of art project: they should not be socially excluded or disregarded. Needless to say, the definition of the artist varies in every project. As we are seeing today, an artistic role has been established as useful, a regular position alongside others within society. So the questions arise, what is educating artists? What is supporting artist practices? What are we expecting from artists?

Whether to address these point to artists is crucial to the survival of residency programs because the motivation behind art projects is so diversified nowadays. Artists have a right to select residency programs, instead of residency programs choosing artists.

Once, S-AIR's Director Shibata mentioned how an artist is like a bee playing the role of catalyst, determining how sexy the residency program will be as a flower. By using this example, there are many flowers blooming all over Japan. If no bee comes over to it, nothing will happen: bloom once and no seed is carried on to the future. What is the best way to attract bees to preserve life?

It can be bloom in an area with no other flowers, or stand out from other flowers by being terribly big, terribly small, extremely fragrant, or extremely colourful. It can receive a windfall by catching a bee flying over to

a different flower. Or can it collaborate with other flowers to make blooming fields?

*Oh no.... SMAP's hit song is repeating in my head! \**

To contribute to writing a future of artist residencies, I was going to describe something else, not these stereotypical answers. However, what I really want to assert, and believe is absolutely important, is that each residency should show its individuality and brush up on its originality. Even if I were to introduce the technical advice, philosophies and objectives of successful residencies here, it would be obvious that each institution cannot just copy others and that outcomes would not be the same under different circumstances.

When I was researching artist residencies in the Netherlands, I was astonished by how many artists exist in this world, many more than I expected, including artists who called themselves artist, who are aware of their own practice as art. Nowadays, the position of curators and art managers is super shiny, leaving artists under the shadow. But there is nothing more important than to say that artists are essential for artist residencies. To challenge ourselves to keep moving toward the future, what are artists looking for at the residencies? How can we support artist practices? What can we prepare for that? Don't be afraid, as long as artists are active in this world, our position is secure. Being confident and doing one's best, the bee comes from far away, nearby, or somewhere else in this world, to bring various flowers to bloom, which is the destiny of the artist residency. Finally, the consequences of diversity lead to the creation of a robust and flexible foundation of artist residencies.

\*SMAP is a Japanese boy band that produced the hit song "The one and only flower in the world."

**伊藤 恵理**

(長野県南木曽町地域おこし協力隊、南木  
曽アーティスト・イン・レジデンス発起人)

**田村 剛**

(秋田公立美術大学 景觀デザイン専攻 助手)

**坂本 泉**

(Artist In Residence Yamanashi [AIRY] 代表)

今年初めて自分でAIRを主催して、湧いてきた疑問を明確にすべく、S-AIRのキャンプに参加しました。最前線でアートマネジメントをされている方々のレクチャーを聞いたり、札幌のホットなアート施設を訪れたり、頭と体をめいっぱい使うプログラムでした。このキャンプに参加して一つ、自分の中で持っていなければならない軸というものが、はっきりしました。それは、ものごとを起こすときに、その最小単位が人であるということをお忘れなさい。とことん相手の立場になること。それは、地域に根ざしたお祭りでも、現代アートでも同じなのだということでした。そしてAIRのみならず、アートの世界がもっと広がっていくためにはどうしたら良いのかという、根源的な問いにまで発展し、参加者みんなで話し合えたことは、とても貴重な時間でした。問いや考え、悩み、現在、未来、AIRに対してここまで真剣に話す人たちに出会えたことは今までありませんでした。

実はAIRCAMPの数ヶ月前に天神山へ見学に来ており、一度見ているということもあって、正直なところCAMPが始まるまでは、少しチャラけて構えていたように思います。でもプログラムが進むにつれて、何故か前に「見学」に来た時とは違うものが見えてきていました。実際に自分たちもAIRを運営していこうと模索し始めた中で参加した今回のこのCAMPで、それぞれの施設や取り組み、アートイベントを見たことは、これまでとは異なった視点を自分に与えたということに、終了後、秋田に戻ってから気づきました。そして、結局のところ最も記憶されていることは、他の参加者を含む、このCAMPに関わっていた方々のことと、そこで交わされた言葉の数々でした。全国各地でAIRに関わろうとする、少しレアな人たちをほわりと紡ぐ。AIRCAMP2015は、自分にとってそのようなAIRについての継続的な学びのための繋がりを提供してくれた価値のある場となりました。

高知、兵庫、鳥取、千葉、東京、長野、山梨、宮城、秋田、青森、北海道から  
愉快な講師陣と17名の参加者たち+α

ひとまずはお疲れ様でした！

まず三日間AIRについて話しまくるなんて経験は初めて

普段はそんな相手もいないから

ここではみんなが熱くて素直で何かを得て持ち帰ろうとしている

参加者はほとんど自身もアーティストで運営もしている人たちが

みんなの共通の悩みや疑問、やりがいで盛り上がったな

AIRに対する初心を取り戻した

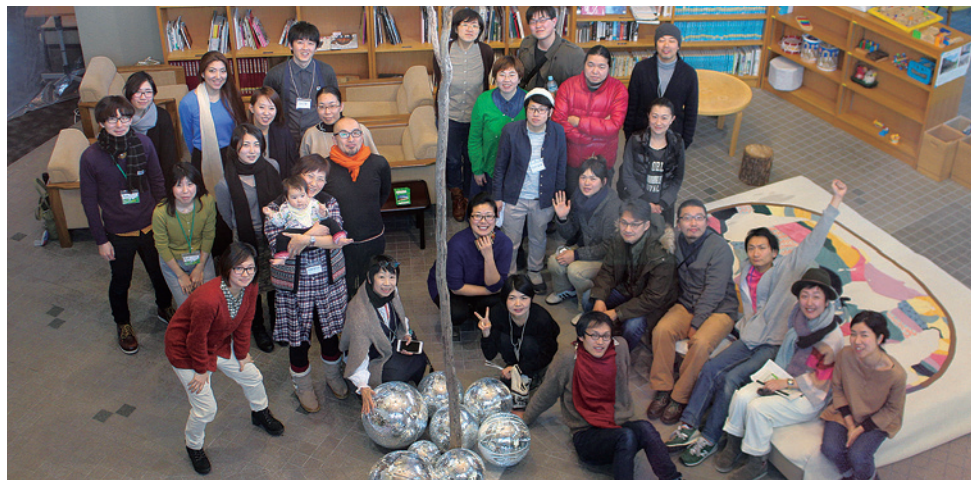
日本で今AIRが来ている実感あり

AIRYを始めた10年前に比べると隔世の感が大きい

とにかく全国に熱い同志がこんなにいるんだという驚きと喜び

それはこころ強い強い強いこと！

そんな最高の仲間たちと知り合えたことが宝です。

**AIR CAMP 2015 記録集**

2016年5月発行

発行・編集 特定非営利活動法人 S-AIR  
〒060-0906  
札幌市東区北6条東2丁目2-10 3F-A

助成 国際交流基金アジアセンター

デザイン 小川 陽

撮影 ハレバレシャシン(クレジット表記あるもの以外の  
AIRCAMPワークショップ&イベント全般)、研修参  
加者(市内案内ツアー写真の一部)、他はクレジット  
表記の通り

翻訳 植村絵美

**AIR CAMP 2015**

アーティスト・イン・レジデンス事業  
人材育成キャンプ&フォーラム アジア

主催 特定非営利活動法人 S-AIR

助成 国際交流基金アジアセンター、文化庁 平成27年  
度文化芸術の海外発信拠点形成事業、札幌市芸  
術文化振興助成金

企画運営協力 さっぽろ天神山アートスタジオ

協力 全国のAIR運営団体によるAIRネットワーク準備委  
員会(現・AIR NETWORK JAPAN)、北海道教  
育大学アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG